# 『臺灣堡圖』に未掲載の地形図について

鳴海邦匡（大阪大学・特任研究員）

本報告は、『臺灣堡圖』（堡圖原図）と称される台湾の地形図について、未掲載分の一部の所在を確認したものである。この『臺灣堡圖』は、1906（明治39）年、臺灣日日新報社より刊行された2万分1地形図であった。

もともとこの地形図の作製は、臨時台湾土地調査局による土地調査事業（1898～1905年）に由来する。大縮尺（1200分の1）の地籍原図を作製するために三角測量を実施し、それらを集積したものがこの地形図である。それらは、1904（明治37）年までに作製され、その総数は全部で464図幅（一覧図も含めて）、実際には統合や省略により458図幅を数えるものであった。ただし、刊行された図集ではそれを全て掲載したのではなく、基隆 Jilong、高雄 Gaoxiong、澎湖諸島 Pen ghu Lie dao 付近などは掲載されていない（図1）。それは軍事的な理由などから掲載を見送られたためであるが、その数は56図幅にのぼる。その後、こうした規制は若干緩和されることとなり、1913（大正2）年時点で掲載を見送られた図幅は49図幅を数えることとなったが、昭和に入って満州事変（9・18事変）や日中戦争の影響にともない再び公開の規制が強化されることとなった。この間の経緯は、施（1996）に詳しい。

この『臺灣堡圖』は、近年、台湾においても重要な意義をもつ近代初期の地形図として広く注目を集めている。リプリント版として影印版が1996年に刊行（遠流出版事業）されたほか、台湾中央研究院における Web-GIS（台湾歴史文化地図システム、http://thcts.ascc.net/）での公開（図2）も進められており、その利用が一般にも容易になりつつある。先に少し触れた遠流出版からの影印版に寄せられた施 添福教授（台湾師範大学、現中央研究院）の解説によると、このリプリント版は、国立中央図書館台湾分館、国立台湾大学地質系に所蔵される地形図をもとにしたものであり、そのほか東京大学、防衛研究所、国立国会図書館等でも調査を実施したという。ただし、未掲載の図幅は全部で78枚となっている。

さて、こうした未掲載分の地形図の所在を確認するため、今回は国土地理院に所蔵される『国外地図目録』および『国外地図一覧図』（全4巻、図3）を参照することとした。それはこの目録が現時点で最も体系的に外邦図を記したものと考えられるからである。この目録や一覧図は、1958（昭和33）年に防衛庁防衛研修室（現防衛研究所）の予算により、地理調査所（現国土地理院）が作成したものであり、当時、地理調査所が保有して

**図1 『臺灣堡圖』に未掲載の地図**

**※『臺灣堡圖』（臺灣総督府臨時臺灣土地調査局　1996）より「検索地図」を使用**

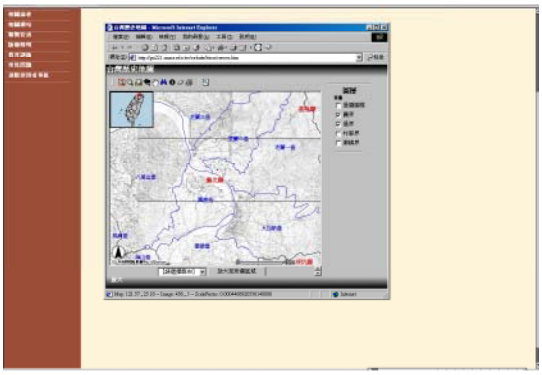

**図2 台湾歴史文化地図システム　（http://thcts.ascc.net/）**

**※「臺灣堡圖」などをベースマップとして公開**

**図3　国土地理院所蔵『国外地図目録』および『国外地図一覧図』より「第一巻　旧日本領」表紙**

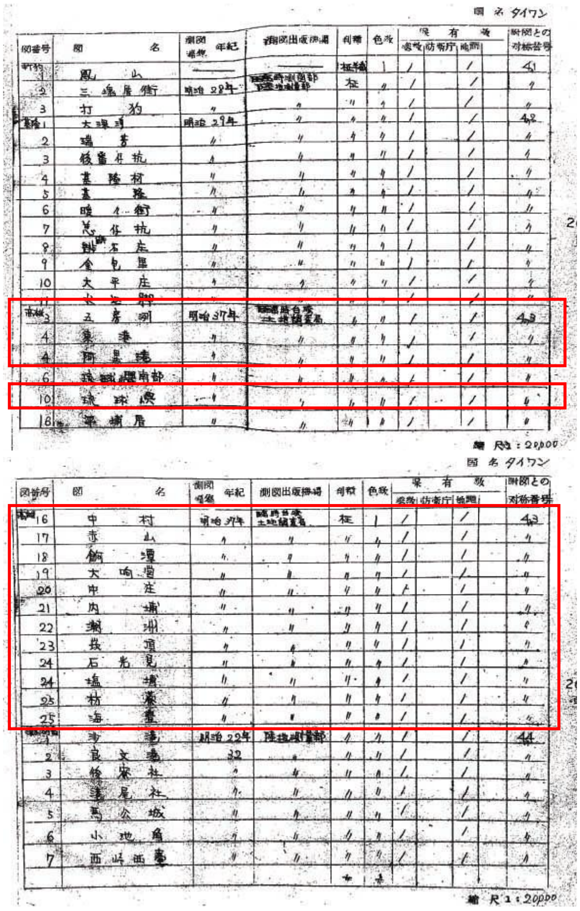


**図4　『国外地図目録』「第一巻　旧日本領」より267～268頁**

いた外邦図を調査したものである。閲覧した資料は国土地理院に所蔵される資料であるが、同様の目録は国会図書館においても閲覧することができる。目録作成の経緯やその位置づけは長岡（2004）や小林（2006）に詳しいが、これらの外邦図そのものについては、現在、防衛庁に保管されていることが判明している。

この4巻の目録は、「第一巻　旧日本領」、「第二巻　北方」、「第三巻　支那」、「第四巻　南方」で構成されており、そのうち台湾については第一巻の「へ、台湾」（244～269頁）に記載されている。ちなみに第一巻の構成は、「1、輿地図」、「2、航空図」、「3、旧日本領」、「イ、南樺太」、「ロ、千島列島」、「ハ、朝鮮」、「ニ、小笠原諸島」、「ホ、沖縄群島」、「へ、台湾」、「ト、南洋諸島」となっている。

この「第一巻　旧日本領」のうち「へ、台湾」に記される地図のリストを探してみると、該当の地図は267頁から268頁に記載されていたことが確認された。それは、項目「測図編集年紀」が明治37年で、項目「測図出版機関」を臨時台湾土地調査局と記すものであり、高尾付近のみの図幅を掲載する。残念ながらリストにあげられた図幅は全部で18点しかなかった。この18点の地図については、調査の時点で全て各1点のみが存在することとなっている。

そこで、次にこの目録に掲載された図幅について、リプリント版（遠流出版）の『臺灣堡圖』に採録されているかどうかを見比べてみた。その結果、18図幅のうち16図幅が未掲載であることを確認することができた（図4）[1)]。つまり、リプリント版『臺灣堡圖』に未掲載であった78図幅のうち、16図幅の所在を今回の作業から確認することができたということになる。ただし、この16図幅は何れも1913（大正2）年の時点で非売品扱いの地図ではなかったことは注意しておきたい。

今回のレポートは、『国外地図目録』および『国外地図一覧図』に記載されるごく一部の地図を検索したものであったが、これまでに未確認であった地図が掲載されていることを確認することができた[2)]。また、『臺

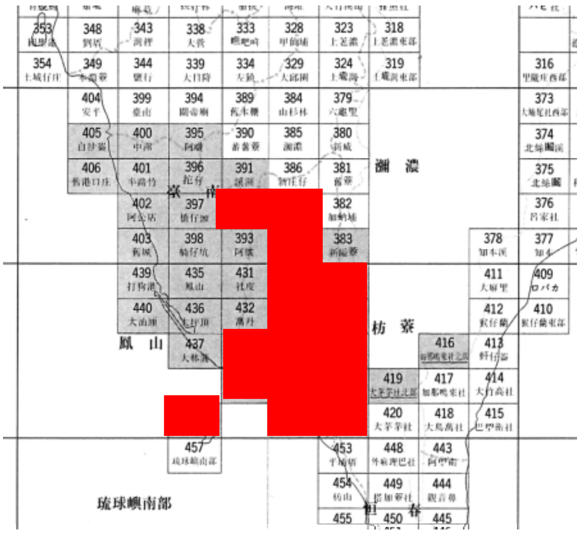


図5 存在の確認される図幅について

※『臺灣堡圖』検索地図の拡大

灣堡圖』に関連してこの目録および一覧図には、『臺灣地圖』と呼ばれる地形図も掲載することを付記しておきたい。この『臺灣地圖』は、これまでみてきた『臺灣堡圖』を編集した10万分の1地形図であり、臨時台湾土地調査局により1905（明治38）年に作製された。それは、一覧図も含めて全部で36図幅を数えるものであった。この地形図について、今回調査した目録では、全36図幅のうち、基隆周辺の台北のみを欠いた33図幅を掲載することが確認された（265〜266頁）。これらの33図幅は、目録の調査時点でそれぞれ各3枚が所蔵されていたことが記されている[3)]。

このように、簡単な作業ではあったが、これまでの検証から『国外地図目録』には従来確認されることのなかった図が多数掲載されている可能性を示すことができた。外邦図は環境や景観の変化を知る学術資料として多くの可能性を秘めている地図であることから、今後、この目録に掲載された地図の学術的な利用が期待される。

## 注

1）加藤敏雄氏（株式会社科学書院）からの御教示によると、防衛研究所図書館に所蔵される外邦図のなかには、この「堡圖原図」も含まれているという。それは高尾付近について計18図幅が所蔵（配架番号1804-3）されているということである。それらの点数や地域が『国外地図目録』に記載されるものと一致することから、その関係が想定される。今後、確認したい。

2）当日の報告（12月23日、第7回外邦図研究会、立正大学大崎キャンパス）の際、研究会に参加していた范毅軍（Fan, I-chun）氏（国立中央研究院）より、それまで未確認であった『臺灣堡圖』の図幅のうち、1枚を残して全ての存在を、アメリカ（米議会図書館）において確認することができたとの報告があったことを記す。

3）施（1996）の解説によると、この『臺灣地圖』については、執筆当時、所蔵が全く確認されていないこととなっている。しかし、その後、大與出版有限公司（台北）より1999年に『十萬分之一臺灣地圖全集 』として出版されたようである〔国立国会図書館ＨＰよりテーマ別調べ方案内〈アジア関係資料／中国の地図（地域別）〉、http://www.ndl.go.jp/jp/data/theme/asia/theme_asia_51.html#taiwan〕。これについては、まだ未確認であるのため、早急に確認したい。

## 文献

小林　茂 2006．近代日本の地図作製と東アジア－外邦図研究の展望－．E-journal GEO，1(1)：52-66．

施　添福 1996．《臺灣堡圖》日本地臺的基本図．臺灣総督府臨時臺灣土地調査局『臺灣堡圖』1-14．

臺灣総督府臨時臺灣土地調査局 1996．『臺灣堡圖』台北：遠流出版事業．

長岡正利 2004．外邦図作成の記録としての各種一覧図と地理調査所における外邦図の扱い．外邦図研究会『外邦図研究ニューズレター2号』17-23．大阪大学文学研究科人文地理学教室．